

「新しくされる絆」

詩篇
ヨハネによる福音書

第22篇12節～18節
第19章23節～27節

説教 村上修平牧師

ヨハネによる福音書の著者ヨハネは、自分のことを「愛弟子」(ヨハネによる福音書19章26節)と呼んでいます。自分はイエス様に愛されている弟子だと本気で思っていたのでしょう。もしかしたら、他の弟子達も、自分こそ愛弟子であると思っていたかもしれません。それほどに、イエス様は彼らを愛されたことが分かります。主イエスは十字架に架けられる前、弟子達に、「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。人がその友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない。」(15章12～13節)と言われました。そして、み言葉の通りに、愛する者のために十字架の上でご自分の命を捨てて下さったのです。

十字架刑を執行したローマの兵卒達は、「イエスを十字架につけてから、その上着をとって四つに分け、おのおの、その一つを取った」(23節)とあります。また、彼らは下着までも剥ぎ取り、「それを裂かないで、だれのものになるか、くじを引こう」と言って、一枚の下着を自分の物にしようとかくじを引き、イエス様の苦しみなど気にも留めようとしませんでした。これほどの辱めは考えられないと思います。イエス様は尊厳も何もかも剥ぎ取られたのです。

旧約聖書に、悪人からひどく苦しめられた人のことが記されています。「まことに、犬はわたしをめぐり、悪を行う者の群れがわたしを囲んで、わたしの手と足を刺し貫いた。…彼らは互にわたしの衣服を分け、わたしの着物をくじ引にする。」(詩篇22篇16～18節)これはイエス・キリストの十字架の出来事を預言したみ言葉であることを、ヨハネは知りました。聖書のみ言葉、神様の思いを成就するために、イエス様は苦しみを受けて下さったのです。

私たちも生きていく中で多くの苦しみを体験します。特に、人の関わりの中で傷つけられたり、辱められたりします。集団でいじめられることもあります。何も悪いことをしていないのにいじめられ、誰か助けてくれる人もいない。…どれほど孤独なことでしょう。しかし、イエス様の十字架を思い起こす時、私達は孤独ではないことを知らされます。イエス様は、私達を苦しみの中に一人きりで放っておかれなからずです。イエス様は、神の子としての尊厳やご自分の命までも捨てて、私達を愛し、私達

を救って下さるのです。だから、私たちは自分の苦しみの中に閉じ籠もるのではなく、いつもイエス様の十字架を見上げる必要があります。

イエス様の十字架の側には、「イエスの母と、母の姉妹と、クロパの妻マリヤと、マグダラのマリヤ」(25節)とが立っていました。彼女たちはイエス様の声が聞こえるほどに十字架の側近くに立ちました。母マリヤは、目の前で愛する息子が苦しむ姿をどのような思いで見っていたでしょう。しかし、マリヤはどんなに苦しめても、十字架上のイエス様から目を離さないのです。このマリヤの姿は私たちの祈りの手本です。私たちが日々経験する出来事の中で、喜びも痛みも苦しきも、罪さえも、それらを全部抱えたまま、イエス様の十字架の側に立ち続けること、イエス様の声が聞こえるほどに、聖書のみ言葉に耳を傾けること、これが祈りです。

イエス様は、イエス様の十字架に近寄る者に信仰を求められます。イエス様は、母マリヤに、「婦人よ、ごらんなさい。これはあなたの子です。」(26節)と言われて、愛弟子ヨハネを示されました。母親に対して失礼にもあたる「婦人よ」という呼び方によって、イエス様は、血のつながりを超えた新しい絆に気付かせようとしておられます。同じくヨハネにも、「ごらんなさい。これはあなたの母です」と語りかけ、家族でも親戚でもない他人の彼に母マリヤの世話を託されました。《私を信じる信仰によって、あなたの隣人を愛しなさい》と命じられたのです。

十字架の側に立ち、イエス様を見上げて歩む私たちに、イエス様のご愛が注がれます。赤の他人であり、どんなに頑張っても一つになれない私達を、イエス様は招き寄せ、親子の愛情をはるかに超える絆で結び合わせて下さるのです。家族というものは、よく分かっているつもりで、実は互いに分かっている者同士の集まりではないかと思えます。そして、家族だからこそ受ける傷も大きいのです。親であり、子であるという関係をひとまず脇において、十字架のイエス様の言葉を聴くことが大切です。《ごらんなさい。その人は、私が命を捨てるほどに愛した、かけがえのない人です。あなたもその人を愛しなさい。》とイエス様は言われるのです。

(記 村上修平)

